

P2-011

出産メモリアル事業が子育てに及ぼす影響： Baby Story における感想はがきの分析を通して

松井 剛太¹、越中 康治²

¹香川大学教育学部

²宮城教育大学

1. 【目的】

近年、妊婦の出産に伴い、メモリアル事業として記念品を贈呈するサービスを実施する産院が増加している。本研究では、出産メモリアル事業が家族の子育て意識にどのような影響を及ぼすのかを検討することを目的とする。

2. 【方法】

(1) 対象 本研究では、株式会社コミットコーポレーションが実施している「BABY STORY」を対象事業とする。「BABY STORY」は、産婦人科医院から家族への出産記念プレゼントとしてフォトムービーを贈るものである。家族が撮った赤ちゃんの写真や動画、医院の映像、メッセージを素材として制作されたDVDで、タブレットやスマートフォンでも視聴できるようにされている。(2) 分析方法 Baby Storyのサービスを受けた家族の感想はがき(48病院1673通)における記述を分析した。分析には、樋口(2004, 2015)を参考に、KH Coder (Ver. 2.00f)を使用した。また、形態素解析(文章を単語あるいはフレーズ毎に切り分ける処理)には、KH Coderに同梱された茶筌(ChaSen)を使用した。はじめに、1,673件の自由記述データを分析対象ファイルとして前処理を実行した。文章の単純集計の結果、3,733の文が確認された。分析に使用される語として24,574語(異なり語数1,783)が抽出された。

3. 【結果】

語の共起ネットワーク(最小出現数30、画数250)を描くことで、典型的な記述パターンの視覚化を試みた。共起ネットワークを概観すると、典型的な記述には以下のようなものがあることがわかった。「DVDを何度も見ている」「産んだ・生まれたときの気持ち」「出産・誕生の感動・喜び」「初めての育児」「幸せな気持ち」「思い出す・涙が出る」「一ヶ月経って改めて懐かしを感じる」「将来、子ども(息子・娘)が大きくなったら・成長したら見せたい」「プレゼントとして渡したい」「一緒に楽しみたい」「一ヶ月経って成長を感じる」「受け取る前に携帯で動画を見れる」「本当にありがとう」「今回も楽しみにしていた」「上の子・〇人目にも作った・作ってあげたい・お願いしたい」「主人・両親も喜んでいる」

4. 【考察】

BabyStoryは、家族とともに出産・誕生の感動を思い出し、前向きに子育てに取り組むことを後押しする役割を果たしているといえそうである。他方、「入院中にもっと写真を撮っておけばよかった」「自分自身で写真を選べると良い」などの記述もあり、これらが改善すべきポイントである可能性が示唆された。

P2-012

母親のストレス対処方法の変化 ～産後4か月と10か月の比較～

井倉 一政、宮崎 つた子

三重県立看護大学

【目的】

核家族化や少子化など社会的背景の変化により、育児について十分な知識を得る機会が少ないまま妊娠・出産を迎える母親が増加し、産後の母親は、育児に対して不安な気持ちを抱えながら子育てを行っていることが報告されている。産後の母親の10～26%程度が罹患するとされる産後うつは、精神保健の重要な課題のひとつである。

産後うつに関連する要因として、母親の年齢や職業、出産回数、家族形態、子どもの人数、健康状態、パートナーとの関係、社会的なサポートなどがこれまでに報告されている。本研究では、出産後の母親のストレスやその対処方法の変化を明らかにすることを目的とした。

【方法】

対象者は、A市内の3つのクリニックで2017年1月～6月に1か月児健診を受診した母親276人である。研究者から、研究目的や方法、研究協力の自由、個人情報保護などを文書と口頭で説明し、同意書を得た。産後4か月と10か月に郵送法で記名自記式質問紙調査を行った。調査内容は、基礎属性、育児協力者の有無、エジンバラ産後うつ質問票(以下、EPDS)、育児ストレスインデックス(以下、PSI)、ストレス対処方法の特性(以下、BSCP)とした。PSIとBSCPは、尺度開発者の使用許可を得て用いた。基礎属性と育児協力者の有無、EPDSは、記述統計を算出し、産後4か月と10か月の母親のPSIとBSCPの変化の検討には、t検定を用いた。統計処理には、IBM SPSS Statistics 24を使用した。なお、本研究は、三重県立看護大学倫理審査会の承認を得て行った。

【結果】

4か月と10か月ともに調査に回答した母親は69人(回収率25.0%)であった。平均年齢は、 31.64 ± 4.34 歳であった。育児ストレスの結果では、「子どもが期待どおりにいかない」と「刺激に敏感に反応する／ものに慣れにくい」の項目で10か月よりも4か月の方が有意に高く、「親につきまとう／人に慣れにくい」と「夫との関係」で、4か月よりも10か月の方が有意に高い結果であった。また、ストレス対処方法では、「回避と抑制」で有意な差が認められ、4か月よりも10か月の方が「回避と抑制」の点数は高かった。

【結論】

産後4か月よりも10か月の方が、母親の育児ストレスの対処方法の「回避と抑制」を多く用いることが明らかになった。育児中の母親が援助希求行動を取ることができるよう、必要に応じて家族や専門家などの周囲による母親への関わりが重要であると考えられた。